



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニコラウス・クザーヌス「光の父の贈り物」 : 「イエス・キリストにおける世界の創造と完成」の神学
Author(s)	高岡, 尚
Citation	基督教学, 29, 31-34
Issue Date	1994-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46547
Type	journal article
File Information	29_31-34.pdf



ニコラウス・クザーヌス『光の父の贈り物』

——「イエス・キリストにおける

世界の創造と完成」の神学

高岡 尚

『光の父の贈り物』De dato patris Iunium は、ヤコブ書第一章第十八節を *initium aliquod creaturae* とする版のブルガタ訳聖書を用い、ヤコブ書第一章第十七と十八節に依拠して試みられた「イエス・キリストにおける下降と縮限、世界の創造と完成」の神学である。以下は、その全体的内容の概説である。

第十七節 *omne datum optimum* (以下、「すべての最善な贈り物」) を、仮に「最善な者である神からの最善な贈り物であるところの各々の被造物すべて」と解釈することによって、第三一六、十二節を「疑いない信仰と祈りに応えて、神はだれにでも惜しみなく、人間の完成、

生命の冠である *sapientia* (以下、英知) を必ず与える。」という主張として読むことができ、そして、第十七、十八節を、その主張の根拠づけ「父によって贈られる、真理の言葉・イエス・キリストにおける、世界への神の下降と縮限」として読むことができる。

I 神は「最善なもの、すなわち、存在しうるものすべて」であるがゆえに、その善性に基づいて自らの栄光の富を他者へと伝達する。すなわち、父はその最善性すなわち絶対的な無限性、絶対的な普遍性、永遠性において「真理の言葉・長子」を「*initium creaturae* (以下、「被造物の始まり」)」「英知」「父の完全な光」として生んだ。

1 「真理の言葉・長子」は、そのペルソナにおいて存在に引き出された「人間の種的な本性」の「現実態において存在している知性」において「子である神の最善性」に完全に合致し、人間の種的な本性の可能な完全性の全てを現実には有するひとりの普遍的な人間、イエス・キリストである。

2 また彼は、「現実態において存在している知性」の、すべての時間性個性性を包含する普遍性において、すべての「可感的個別的被造物」に先立つ「創造される被造物の始まり」であり、また、「あがないによる被造物の初穂・復活のイエス」でもある。

3 また彼は、「父なるそして子なる神の最善性」に完全に合致した「現実態において存在している知性」において、「父なるそして子なる神の最善性」についての完全に認識すなわち「英知」を有する人間である、それゆえに「被造物への父の完全な現れ」「父の完全な光」である。

II 1 この「真理の言葉の最善性を英知において所有するイエス・キリストの知性、被造物の始まり」がその「最善性であるがゆえに単純で分割しえない一なる自らの全て」を世界に贈り、それが「存在するだけのもの」「存在し、生命あるもの」「存在し、生命を有し、感覚するもの」「存在し、生命を有し、感覚するものであり、知性的なもの」に属するそれぞれの種個別の本性へと下降し、それらのうちに受容され、「nos（以下、私たち）」

すなわち「おのおのの可感的個別的な被造物、可感的被造物の世界」の存在が始まる。

2 これは、可感的個別的被造物の無からの立ち上がり、それぞれの種個別的な本性が許す限りの最善な有り方での「最善性、被造物の始まり」への上昇でもある。それゆえ、可感的個別的被造物はすべて、「私たち人間にはいかなる仕方によっても認識されえない神の最善性」の無限な栄光と富の、私たち人間に認識されうる「現れ・或る光・或る被造物の始まり」である。

III この「可感的個別的存在者の世界」は、「存在しるところのものすべて」であるがゆえに、自分の「存在」と「業」と「業の目的」とが同一であるところの「最善性・絶対的な無限性・真理の言葉・被造物の始まり・英知」の業である。それゆえ、「可感的個別的存在者の世界」の全体が「神化、イエス・キリストの英知への到達、被造物の始まりへの流帰」へと志向する。

この「可感的個別的存在者の総体である可感的世界」の神化への志向は以下のように進行する。

1 「可感的な世界」は全体として、「存在するだけのものは、感覚するものを支え、感覚するものは知性あるものを支える」という仕方で構成され、「私たち・個別的な人間」において自らの存在の完全性の頂点に達している。

2 可感的な世界の頂点に位置する個別的な人間の本質は「神化されてはじめて現実態に至り、神の認識を得て充足する知性」である。個別的人間は知性にしたがって感覚と理性の助けのもとに「被造物の世界」の真理の認識を追及するなかで、神の認識への到達を志向する。

3 しかし、その真理認識の追及は、超克しえぬ二つの限界によって阻まれている。すなわち、a、理性の助けに依存する知性は、可感的世界の種類的普遍性を越えて「存在することというまさにそのこと」「存在の普遍的な形相」の絶対的な普遍性、無限性に向かうことは不可能である。それゆえ、「贈られる最善なものが下降して有限な種の個別の本性へと縮限されること」に起因して存在している「可感的世界の本質」を認識することすらも不可能である。b、それに加えて、原罪は人間の理性の認識能力を「絶対的に普遍的なもの」から引き離して感

覚に隷属させ、肉体の欲望の関わる極めて個別的な事物に向かわしめる。

4 にもかかわらずしかし、「可感的個別的な存在者の被造物世界」は、個別的な人間に神の栄光の富を与えるために、最善な神によって、「最善なものの完全な自己目的性」のうちに始められた創造の業の一環である。それゆえ、その目的は不可抗力的に確実に達成される。

すなわち、その目的は、すでに「最善性、つまり、存在の絶対的な無限性と絶対的な普遍性、すなわち永遠性」において到達されているのである。最善な神の栄光の富は個別的な人間のすべてにすでに「わけへだてなく惜しみなく与えられている」。なぜなら、最善性永遠性の中で、真理の言葉である「被造物の始まり・父の光」イエス・キリスト自身が、その「現実態において存在する知性」の中で「人間の種の本性の究極的な完全性への現実態的な到達」をとげているからである。個別的な人間どもの多様性において個的に分有されるものどもはすべて、普遍的なひとり人間としてのイエス・キリストの中に、いわば単純な力の中に存在するように存在するのであ

る。すなわち、「私たち個別的な人間」は、最善性、普遍性、永遠性において「真理の言葉、被造物の始まり、初穂、父の光」のうちに生み出された「被造物の或る始まり、或る初穂、光の子ら」である。

「だれにでも惜しみなくとがめだてしない神は、疑いなき信仰と祈りに応えて、人間の完成であり生命の冠である英知を、必ずお与えになる」というヤコブの教説の根拠はここにある。

そして、この「祈り」は、「この願いに応じて初めて神が英知を贈って下さる」という祈りではなく、「へすでに私たちに贈られている英知」を私たち個別的な人間が謙虚に願うという仕方で受容する」祈りである。

しかも、この「祈るといふ仕方の受容」自体が、「すべての完全な贈り物の父、完成することを自分だけの能力として所有する方」から贈られる「可感的個別的被造物世界創造の業の完成」である。

(完)